
思い出が見える丘

大樹の心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出が見える丘

【Zコード】

Z0627Y

【作者名】

大樹の心

【あらすじ】

いつも失敗ばかりの小学6年生の男の子。その男の子や友達達の純粹すぎる『恋愛感情』や、ぶつかり合つ『友達関係』を1年間に起こる様々な出来事や冒険で描くストーリー。給食・避難訓練・授業・登下校・夏休み・打ち上げ花火・運動会・卒業式・・・いろんな懐かしいエピソードに引き込まれます。難しく考えないで素直にのんびりゆつたりほのぼの読み進めて下さい。うぶでくすぐつたいテレのある恋愛と友情に『どきどき』や『感動』を味わえるはずです。

1、通学路

寝ぼけた頭・・・・髪の毛には寝癖がついていた。ボーッとして目を開けるのもめんどくさい・・・・

力チャツ

家からると、外には元気すぎる太陽が力いっぱいに輝いていた。

今は朝の7：30、学校へ行く時間。楽しい事とか嫌な事・・・・。いろんな事が始まる1日のスタートだ。僕は大きな伸びをしながらいつもの通学班の集合場所に目を向けてみた。そこにはもう友達のみんなが全員揃つていて、集合時間になつてもこない僕の事を、いろいろしながら待つているのが見えた。

「『めん』めん！遅れちゃつた・・・・待つた？？（に）が笑）」

いつも朝の集合に遅れてしまう僕。今日もいつも通りに、みんなの機嫌を取る得意のにが笑いで言った。それを聞いた通学班の班長、のぶ君が・・・

「遅いよーきよちゃん！もううずつと待ってるんだよーー！」

と少し怒りながら僕に言つてきた。

同じクラスののぶ君。僕にとって1番の親友だ。僕達2人は、「小学校生活のどんな時でも一緒にいた」と言えるくらいの仲良し。学校に行く時も一緒に、授業の間の5分間休みも一緒に。長い休み時間でも一緒に、帰る時も一緒に帰る。もちろん学校が終わってから

も、2人で一緒に遊んでいた。のぶ君は僕にとつて一番大切な親友であつて、僕の憧れの存在でもあつた。

のぶ君はとにかく何でも得意。やる事全部で、いつも一番になつていた。どんな遊びをやる時も、どんなスポーツをやる時も、もちろん勉強でもいつもいつも僕よりも上手だった。必ず一番がのぶ君で、2番が僕。小学6年になるまでのこの5年間、ずっとそんな関係が続いている。もちろんそれは通学班でも同じ。僕がずっと憧れていった通学班の先頭を歩く班長、それもやつぱりのぶ君がなつてしまつた。おかげで僕は一番後ろを歩く副班長。いつまでたつても僕はのぶ君に勝てない。

前のほうで、いろんな子と話をしながら楽しそうに歩くのぶ君。僕は一番後ろで話し相手もいない。そんな暇が多い通学路を、僕はいつも下を見ながら歩く癖があつた。

見るのは通学路と、僕の前を歩く2年生の女の子。僕はその女の子の足を、いつも見ながら歩いている。今日はスニーカー、昨日は革靴。雨の日は、赤い長靴を履いてくる。多分この子が一番好きな色は赤色だと思う。だって、傘や雨がっぱもいつも赤色を使っているから・・・・・そんな事を考えながら歩く通学路は、僕にとってはまったく楽しくともなんともない、つまらない時間でしかなかつた。

・・・・・ そんな通学路でも、1つだけ楽しみな場所がある。その場所は・・・
富士山が見える丘・・・・・

静岡から遠くはなれたこの場所。それでも静岡の日本一高い山、富士山を見る事ができるのだ。その小さな丘を通るのが、僕のたつた

一つの楽しみ。今日みたいに天気がいい日は、特にきれいな富士山を見る事ができる。

「ねえ見てよ！…す”じ“きれいだよ！」

その丘に着くと一番先頭のぶ君が、みんなよりも早くそのきれいすぎる富士山を見て指をさしながら叫んだ。

「うわ～ほんとだ…・・・す”じ“ーい」

みんなもどんどんその富士山に驚いていく。一番後ろの僕が遅れて見ると、そこには朝の太陽と大きな富士山が、遠くのほうできれいに輝いていた。

「・・・・・・・ふ”・・・・・・・・・・・」

僕はその富士山を見ながら、朝の冷たい空気を大きく吸い込んで深呼吸をした。

(・・・・・もしかしたら今日は、いい事があるのかも・・・・・・・)

なぜだかきれいな富士山が見えた時はいつもいい事が起こりそうな気がした。久しぶりに見たきれいな富士山。僕はきれいすぎる富士山を見て少しの期待をした。

まだ冬の寒さが残る小学6年生を迎えたばかりの4月・・・・・いつもの今日が始まった。楽しい小学校・・・・・・・長い長い一日が始まったのだ・・・・・・・

2、朝の会

「せつづれ……」

「おはようございます……」

「ちやくせー！」

朝の会が始まった。この授業の前とか終わってた後に言つ命令。命令はいつも日直がやる事になつていて。黒板の右下に書いてある今日の日直・・・その日直番は、お調子者のたけちゃんど、僕の大好きな綾ちゃんだ。

お調子者のたけちゃん。たけちゃんはいつもバカな動きやダンスでみんなを笑わしている。僕のクラスのムードメイカー。天才的なギヤグと表情でみんなの注目をいつも集めていた。

そして、その隣の席に座るのが綾ちゃん。綾ちゃんは僕の初恋の相手だ。とにかくかわいい。どの角度から見ても、どんな表情をしていてもとにかく綾ちゃんはかわいいのだ。授業中や休み時間中、僕はいつもその綾ちゃんをボーッと見てしまう癖があった。綾ちゃんを見ているだけで、すごく心がどきどきしてくる。幸せな気持ちになつてくるのだ。そんな僕は、今日もいつも通りに綾ちゃんの日直姿を一人でボケーツと見続けた。

「どうしたの？きよ君！－！」

僕の隣の席の五十嵐さんが、ボケーツとしている僕を見て心配そうに声をかけてきた。

「…………あつ…………うん…………なつ…………なんでもない
よ…………あはは」

僕は、見つめる田線を綾ちゃんから五十嵐さんに変えて、苦笑いで
答えた。

だいたんで男っぽくて不細工な五十嵐さん。いつも僕はその五十嵐
さんにバカにされたり、からかわれたりしていた。身長も僕よりぜ
んぜん大きい。迫力があつて力強い五十嵐さんは、僕にとつてちょ
つと怖い存在の女の子かな…………

「出席を取りまーす…………阿部君」

「はい！――！」

「飯田君」

「あ…………はつ…………はい…………」

先生の点呼が始まった。席替えをする前はその出席番号順に、「い
ちのかわ・にのかわ・さんのかわ・よんのかわ」に別れて前から座
っていた。違うクラスでの呼び方は「一号車・二号車・三号車・四
号車」だ。席替えは、2年ごとにクラス替えがあるから、クラスの
変わらない6年生になつた時にやつたばかり。おかげで僕はその
怖い五十嵐さんの隣の席になつてしまつた。大好きな綾ちゃんの隣
をゲットするチャンスはまだしばらくこない。僕は「さんのかわ」
で綾ちゃんは「いちのかわ」。今はまだ、席が遠いけど、いつか必
ず綾ちゃんの隣に座る事を僕はずつと夢に見ていた。

「…………白川君…………白川 清正 君（しらかわ きよまさ）さん（くん）――！」

そんな事を考えていた僕は、自分の出席になっていた事に気付かなければ、ボケーッとまた綾ちゃんを見つめていた。

「…………あつ…………はつ…………はい……」

お調子者のたけちゃんが席を立ち僕を指さしながら・・・

「またまた！なんだよお今の声……へんなの……」

と言つて僕の声を大笑いでバカにした。それを聞いて、みんなも笑い出す。見ると綾ちゃんもそんな僕を見てクスクスクスクスかわいらしく笑っていた。そんなみんなを見ながら、僕はうつむいて赤くなることしかできなかつた。朝から失敗で注目を集めてしまつた僕。はずかしすぎて情けない失敗・・・・・

(やばい・・・綾ちゃんの僕へのイメージが悪くなる・・・大好きな綾ちゃんに嫌われちゃうよ・・・なんとかこの後、かつこいい所を見せていかないと・・・)

僕は心の中で、この失敗を取り戻す方法を必死で考え続けた。

3、笛のテスト

ピロオオ～・・・・・ピィ～・・・・

いろんな所から笛の練習をする音が聞こえてくる。今は音楽室。音楽の授業が始まる前の5分間休みだ。

さつき（・・・・・失敗を取り戻す方法は・・・・・）と心の中で考えていた。そして、次は笛のテスト。また練習をしていい苦手な笛のテストだ。

（・・・・・あ～あ・・・・・・・）

僕は心の中でため息をついた。

今日はあんなにきれいな富士山を見る事ができた。もしかしたらいい事もあるんじゃないかと少しの期待をした。それなのに、全部がどんどん悪いほうへ悪いほうへと進んでいく。

（・・・・・笛のテストでの失敗・・・・・・・）

僕はそのはさかしい失敗の姿を、頭の中で想像をした。

そしてついに音楽室に授業が始まるチャイムが大きく鳴り響きわった。

・・・・・キーンコーンカーンコーン・・・・・・・

チャイムが鳴るとすぐに音楽の先生が教室に入ってきた。いつもは

長く感じるはずの5分間休み。遊んだり、友達と話したり、違う教室に行つたりしていろんな事ができていた。でもなんだか今回だけは、すごく短い5分間に感じる。もう授業が始まる時間になつてしまつた・・・・・

「はい！今日は先週話した通り、笛のテストを行う日です。一人ずつ順番に前に出てきてもらい、笛を吹いていただきます！－」

「え～も～やるのやめや～！？」

みんなの不満な声が音楽室に響いた。それでももちろん先生は待つてくれない。

「は」！！！では阿部君から！前に来てください！！！！あつちよつと待つて、たまには女の子から行きましょうかねえ！」

「え」～！？

遊園地の絶叫マシーンに乗った時の悲鳴。それに似た叫び声で女子達が叫んだ。

（ふう～良かつた・・・女子からだから僕の順番はまだまだ先だ・
・）

自分の順番が少し遅くなつて、ちょっとだけ気持ちが楽になる。

「はい!上手でしたね。よくできました。続もましては・・・」

L

・・・・・名前を呼ばれた子は、前に出てみんなが見守る

中、笛を演奏する。どんどんとその笛のテストが進んでいった。はじめは順番が遅くなつて安心と思っていたけど順番を待っていると、その時間が長ければ長いほど逆に緊張が大きく辛くなつてくる。僕はその緊張を「まかすために、音楽室に飾つてある額に入つたいろいろ有名な音楽家の絵を見始めた。

なんだか不思議なその絵・・・・・・・・いろんな表情のいろんな絵が飾つてある。何のために飾つてあるんだろう？顔を覚えて何かテストでもするのかな・・・・・・？僕はその絵が飾つてある理由がいつも気になつていた。

だいぶ前に、夕方の音楽室に入った事があった。その時見たその音楽家の絵達は、ものすごく不気味で、なんだか少し怖さを感じた事を覚えている。いつもは何気なく見ている絵。暗くなると動き出るんじゃないかな・・・・・そんな風に思えた。

「さて、次の順番は・・・・・ 渡辺 綾香さん！――」

(・・・・・?)

気が付くと笛のテストはもう綾ちゃんのところまで来ていた。

「はー・・・・・」

かわいい声での綾ちゃんの返事。

綾ちゃんは音楽がすごく得意。勉強もいつも上のほう。体育だけが少し苦手だった。みんなも綾ちゃんの得意教科が音楽だということを知っている。そんな綾ちゃんに注目が集まつた・・・・・みんなも期待をしているみたいだ。

（ピイイイ～♪）ロロ～…………予想通り、すじへ上手。他の子よつぜんぜんづま～。

（なんで綾ちゃんはこんなにうまく吹けるんだ……いいな～綾ちゃんは……）

そんな綾ちゃんを僕はついやましく思った。

こんなにかわいくてきれいな声で、しかもやさしい綾ちゃん。多分、綾ちゃんの事を好きな男子は僕だけじゃないはずだ。好意を持つている男子が他にもいるはずだ。男子の間でアイドル的な存在の綾ちゃん。僕はその綾ちゃんを、他の男子に取られたくないといつも思っていた。

進んでいく笛のテスト、順番がお調子者のたけちゃんの番になった。

「えっ僕ですか？ 僕に吹かせるなんて……いいんですか先生？ お金取りますよ」

お調子者のたけちゃん。こんな時でも、みんなを笑わせるような事を言っている。そんなたけちゃんを見て、笑っているみんな。僕は笑いながら様子を確かめるように綾ちゃんのほうをチラッと見てみた。

たけちゃんと綾ちゃん、教室の席は隣だ。その2人を見ていると、くだらない事をするたけちゃんを見て、綾ちゃんはいつも楽しそうに笑っていた。仲のいい2人。この時もやっぱり綾ちゃんはそのたけちゃんを見て、素直な笑顔でかわいらしく笑っていた。

人気の綾ちゃん。多分、その綾ちゃんが好きな男子はたけちゃんだ。

2人のやり取りとか表情を見て、僕はいつもやうつ感じていた。

(あーあ・・・・僕もあんな風におもしろくできればいいのになあ
・・・・・・・・・そうすれば綾ちゃんも、もしかしたら僕の事を好き
になってくれるかもしれないのに・・・・)

僕にないものを持っているたけちゃん。そんなたけちゃんを見て、
僕は悔しい気持ちでいっぱいになつた。

緊張もしないで余裕のたけちゃんだったけど、演奏を聞くとその笛
はぜんぜんへたくそ。へたくそでもここまでバカができればまつた
く問題がないのだ。たけちゃんらしくいや・・・・で終わってし
まつ。

(よじー今日は僕もみんなを笑わせるような事をやってみよつー。
へたくそでも、おもしろければみんなは認めてくれるはずだー!ー)

僕は緊張をしながらも、何か新しい事をしてやるつと強く思った。

「はーーー次は白川 清正君ですーーー」

(・・・・えつーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
番? ? ? ? ? ?)

順番がまわってきて、一気に緊張が高まってしまった。今さつき、
(おもしろい事をやってやるつーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
震えて、体も震えて、もうビリビリよつもない。

「白川君ーー返事はどうしたの? ?」

「ははあつ・・・・はいいいー」

声が裏返った。周りの友達が小さい声でクスクスクスクスと笑う。
・・・はずかしい。ふらふらと緊張の足取りで前まで行くと・・・
・

ピロオオー・ピロオロロオッ・・・・・・・・・・・・震えて
音にならない。別におもしろい事をしようとしてそんな音を出した
わけじゃない。でもその笛の音を聞いたみんなは、今度はさつきよ
り大きめな声でクスクスクスクスと笑い出し始めた。

どんどんはずかしくなっていく僕。ついには顔まで真っ赤になつて
きた。

(へやおおおー! もひひうこでもなれだ! ! ! !)

いきおいで吹いた笛。何とか全部を終わらせる事ができた。

「はい。次は緊張しないでできるよ! 」

もつ頭の中は真っ白。席に戻り座るとそんな僕を見て、隣にいた五十嵐さんがいつも低い小声で僕に言つてきた・・・・・・

「なにやつてんのよきよ題ー音が震えてぜんぜんだめだつたわよー!
！」

言われて得意の苦笑い。でも僕はその笛のテストが終わったという
だけで、心の底からほつとしていた。

結局みんなを笑わせる所か、笑われるだけで終わってしまった笛の

テスト。多分みんなは、清正君らしいや……と思つてゐるんだろう。そう僕のイメージはいつもそんな感じ……

緊張しやすい清正君。頭が悪い清正君。何をやってもうまくいかない、そんなイメージの悪い小学生がこの僕なのだ。得意な科目は特になし。スポーツも普通。女の子と話すのはすごく苦手。気が弱くて情けない男の子。そんな僕の得意技は失敗。何かの発表とかで僕はいつも失敗ばかりをしていた。僕が失敗をすると、みんないつも冷たい目で僕を見つめる。「まだよ……」といういやな冷たい目だ。そんな中で僕ができることは決まつていつも「苦笑い」。毎日毎日そんな日々の繰り返しだ。人気がない目立たない失敗だらけの小学6年生。それがこの僕なのだ。

「はい！全員終わりましたね！！それでは今日の音楽の授業はこれで終わりになります。次は20分休みです。みんな怪我をしないように遊んでくださいね！！」

音楽の先生がみんなに言った。

2時間目が終わつてからやつてくる、20分休み。長くて楽しい遊び時間だ。みんないろんな自分の楽しみ方でその時間を使う。教室で絵を描く子、友達と話す子、校庭で遊ぶ子、サッカーをする子、いろいろだ。僕はいつもその時間を使って、親友ののぶ君と校庭で遊んでいた。音楽の先生が言つたその20分休みという言葉を聞いて、僕はのぶ君と目と目を合わせた。そして目を輝かせながら、2人揃つて大きくうなづく。2人で遊ぶという合図だ。僕達は教室にあるボールを取りに、走つてはいけない廊下をみんなよりも速く駆け抜けていった。

4、勝負の20分休み

人気がない目立たない小学生。そんな僕にも、一つだけみんなの注目を集めるすごい事がある。それは・・・・・僕の親友がのぶ君という事だ。

クラスのアイドルが綾ちゃんなら、のぶ君はクラスの憧れのヒーローだ。かつこよくてリーダーシップがあつてしまっかり者ののぶ君。勉強もできてまじめで、しかもスポーツがものすごく万能。そんなのぶ君を、女子達はいつも憧れの目で見ている。僕の自慢の親友なのだ。

(こいつたいなんでのぶ君はきよ君なんかと仲がいいんだろう……)

みんなはそんな風に思っているはずだ。その理由は僕とのぶ君が隣近所の幼馴染だから。僕はこんな人気がない僕と、いつも仲良くしてくれるのでぶ君にすく感謝をしていた。

そののぶ君と一緒に遊ぶ20分休み、いつもやっているのは人気がある「ドッジボール」だ。校庭に大きな四角い枠のコートを作る。そのコートでチームに分かれてボールをぶつけあうゲームだ。サッカーと違って、このゲームは女子達も一緒に遊んでいた。今日もいつも通りにチームを2つに分ける事になった。

「よーし行くよ・・・・・グッとパツ！――！」

のぶ君がそのチーム分けを仕切った。

チームを2つに分けたりする時にやるこのジャンケンみたいなやつ。これにはいろんな種類がある。僕の小学校ではこの「・・・・・グッとパッ！・・・・・」というリズムを使っている。グーとパーでチーム分けをするのだ。でも隣の小学校では「・・・・・グーパーダジャス！・・・・・」でチーム分けをしている。同じグーとパーなんだけど、そのリズムが違う。他にも「・・・・・グツとパー・・・・・つで分かれましょっ！・・・・・」とかいろんな種類がある。僕が知っている中で一番珍しかった分け方は「・・・・・グチグチグーチーダジャス！・・・・・」だ。なんとグーとチョキでチーム分けをするのだ。初めやった時はビックリした。焦ってパーを出してしまってみんなにバカにされたりした。もしかしたら、ものすごい遠くの小学校では、もつと珍しいチーム分けの仕方をしているのかもしね。なんだか僕は、そのいろんな種類のチーム分けがおもしろくて仕方がなかつた。

さあ、今日も2つに分かれて対決だ。

(さてさて・・・今日の僕のチームはどんなチームだ・・・・・・)
強いチームかなあ～？)

僕はそのチームのメンバーに目を向けてみた。見ると僕のチームには、何でもできる僕の親友、のぶ君が入っていた。のぶ君が一番で僕が2番。いつもはのぶ君に負けているけど、今日のドッジボールは一緒にチーム。なんだかすげく心強い。その他の僕のチームメンバーを見てみた。するとそこにはあの大好きな綾ちゃんが立っていた。もし綾ちゃんが当たられそうになつた時、僕が助ける事ができたらどんなにかつこいいだらうか！！

今日はもう2回も失敗をしている僕。出席の時間と笛のテストだ。それを見て、綾ちゃんが僕の事を少し嫌ってしまったかもしない。

僕はなんとかその失敗を取り戻そうと、この遊び時間の20分休みに勝負をかけた。そして、その運命のドッジボールがスタートする。

(よ～し見てろよ・・・・・絶対にかっこいい所を見せてやる・・・・・)

ばこつ！――・・・・一瞬で散つてしまつた僕。いつもはふざけているだけじゃんけど、スポーツはすぐ得意。あつけなくそのたけちゃんのボールで、僕は撃沈してしまつた。

(くそ！――何がかっこいい所だ！はずかしい！――)

結局簡単にやられてしまつた僕。そんな情けない自分に、心の中で文句を言つた。いつなつたら後の頼りはのぶ君だけだ。

たけちゃんとのぶ君はクラスのスポーツライバルだ。どちらも本当に運動神經がいい。いつもいい勝負をする2人に、みんなの注目が集まつたりする。僕と違つてかつこよく目立てる2人。僕は、そんな2人がすごくうらやましかつた。

(あつ綾ちゃんが狙われている！――)

狙つてるのは普段は仲がいい、あのお調子者のたけちゃんだ。

「ちよつとたけ君！なんで私ばかり狙つの――・・・・・狙わないでよ

――・・・・・

「くつへええ～いやだねえ～！それ――・・・・・

(・・・・・くそつたけちゃんめ！――綾ちゃんばかり狙つて・・・・・い

つもはあんなに仲がいいへせに……

そんな風にも思つたけど、なんだかそんな2人の関係が少しつりやましくも感じた。

(あつ・・・・・)

気付くと、たけちゃんの鋭いボールが綾ちゃんめがけて飛んでくる
!!・・・・・

ばん!!

見事にボールを取つたのは・・・・・・スポーツ万能の、のぶ君だ!

(よしさすがだの、ぶ君!!僕の親友だぞ!!)

自分の活躍じゃないのに、のぶ君の好プレーを見て僕は心中でえ
ばつた。そしてここから、僕とのぶ君の攻撃が始まる。

「行くよー。さよちやん!!」

のぶ君から外野の僕にパスが回つてきた。最強コンビでたけちゃん
やつつけてやる!!まずは、何度も何度もバスを繰り返す!!タイミング
をはかっているのだ。いつもならそのままいいタイミングでのぶ
君が相手をやつつける!!そんな展開だ。でも今日の僕はいつもと
違う!!ここまで失敗を取り戻すために、自分からどんどんせめて
いいつてやる!!標的はもちろん綾ちゃんをいじめた悪者のたけち
ゃんだ!!正義のヒーローがこの僕だ!!

(見てるよたけちゃん・・・・・・・)

と思ったその時、低めのバスがのぶ君から飛んできた。素早くそのボールを僕が取つた！あわてて足を滑らせるたけちゃん！…そこで転んだたけちゃんが一言・・・・・

「あつやべえ・・・・・」

今がチャンスだ！！！今日一番の見せ所！！かっこよくたけちゃんをやつづけてやる！！力いっぱいたけちゃんに向かつて投げたボール！！

「ぐりええええつ！..！」

ボールは見事に・・・・・・校庭を力強く弾んだ。

「あれつ・・・・・」

「なにやつてんだよーーきよりやん！..！」

それを見てのぶ君が僕に怒鳴った。やっぱり僕はいつもだめ男だ・・・・・

「あつやばい！時間だよーー！」

時計を見たたけちゃんが、みんなに向かつて言った。校庭に響き渡る授業開始のチャイム。次の授業が始まってしまう。僕達は校庭を砂ぼこりいっぱいにしながら駆け足で教室に戻った。

結局、この20分休みでも綾ちゃんにかつこいい所を見せる事ができなかつた。頑張つて逆に失敗を重ねてしまつた。僕の中には情

けなせだけで、こつぱいになっていた。

5、教科書の読み

何をやつてもだめな僕。結局、それは遊び時間の20分休みでも同じだった。次の授業は社会、今は歴史をやつている。

社会の歴史はちょっと難しく感じたりもするけど、おもしろく感じる時もある内容が多い。いろんな昔の歴史上の人物。そんなすごい人のすごい話を聞いていると・・・

(かっこいいな~)

とか思う時がある。

社会だけじゃなくて国語の教科書なんかもすこくおもしろい。特に国語で僕が好きな話、それは「スイミー」だ。小さい魚がいっぱい集まって大きな魚を驚かせる話。なんだかその世界にすんなり入れてすごく楽しい話だ。その他にも「ちいりちゃんのかげおくり」とかすこく楽しい話が多い。

だけどそんなおもしろく感じる社会や国語なのに、授業中だとぜんぜんつまらない。なぜなら、その教科書をみんなの前で読む時があるからだ。

出席番号順にまわってくるその順番。指されて立たされて、その教科書を読む。読み書きが苦手な僕にとっては、その教科書を読むというのがすごく苦手。しかも僕はあがりじょつの小心者だ。そんな僕が恥をかく一番のタイミング、それがその音読なのだ。

僕が読む時はいつも声が震えてどうしようもなくなってしまつ。し

かも、わからない漢字がある時は、途中で止まって言葉に詰まる。そして小さな声で隣の席の五十嵐さんにその読み方を聞いたりする。

「ねー・・・・」(こなんて読むの？？)

それを聞いた五十嵐さんは、みんなに聞こえる大きな声でその読み方を言つてしまつ。

「その字は冷静よ！れいせい！…！」

そうすると、みんながまた冷たい目で僕を見る。

(・・・・・そんな漢字も読めないのかよ・・・・・)

という冷たい目だ。はずかしい。

僕と違つてそれが得意な人の読みを聞いていると、なんだかすげく聞きやすくてその内容がものすごく伝わってくる。国語や社会の読み。クラスで一番聞きやすいのは、やっぱり綾ちゃん。きれいな声ですらすら読んでく。しかもものすごくかわいらしき読み方。

男子の中では、のぶ君。感情表現も入つていて、なんだかかっこいい読み方だ。逆に、すごく下手に感じる人・・・それは、僕と同じあがりしじうで小心者の飯田君だ。

太つていて給食が大好きな飯田君。体育と勉強はほんとに苦手。しかもものすごく緊張しやすいのだ。そんな飯田君のもう一つの特徴が、不潔なイメージ。気を抜いているとすぐによだれをたらして、服にはいつもきたない汚れがこびりついている。机にも給食の汚れがついていて、しかも何日もそのまま。その汚れが乾燥していく力

ピカピで汚らしい。だけど、そんな飯田君にも仲良くしてくれる親友が1人だけいた。それは、やせている無口な山田君だ。

まったく目立たない地味すぎる山田君。見た目は細くて身長だけはやたらでかい。そんなでかいのに目立たないのだ。僕はその山田君の声を聞いた事がほとんどない。とにかく無口。もしかしたら一日中しゃべらない時もあつたりするんじゃないかな??と思つたりするくらいだ。

2人は地味でかつこ悪い、クラスでもレベルが低いデブヤセのでこそこのコンビだ。僕はいつもそんな人気がない2人とあまり仲良くしそぎない努力をしていた。だけど・・・・僕が何かの発表とかで失敗をすると、その授業が終わつた後、飯田君は必ず笑顔でやさしく僕に話しかけてくれた。多分同じ匂いがするんだと思う。僕の失敗にやさしくフォローを入れてくれる。うれしいような、哀しいような・・・・僕はそんな複雑な気持ちをいつも味わっていた。

「はい、では飯田君。次からの文章を読んで下さい。」

「ははっはいいいい・・・」

その飯田君が、ここからの文章を読むらしい。こんな時、同じ辛さを知つてゐる僕は飯田君を心の中でいつも応援をしている。

（よ～し・・・・失敗するなよ・・・・漢字は大丈夫かな・・・・）

飯田君が読む文章を、先に目で追つて読んでいく。今回は難しい漢字はなさそうだ。

（大丈夫だぞ！飯田君！－後は緊張しなければいいけるよ－－がんばれ！飯田君！－）

そしてついに飯田君の読みが始まった……

「…………そつ…………その…………よ…………よくとし…………えつ

翌年でありまするよな？あつとい徳川 いといえやす？…………は…………

「

（…………やつぱり緊張で文章がめちゃくちゃだ……あ～あ…………可哀想に…………）

いつもこの飯田君の順番が回ってくると、僕もその読みの準備を始める。前の順でいくと、僕はその飯田君の10回後に順番が回ってくる。前もってだいたい10回先の文章を見て漢字に読み仮名をふっておぐ。

（…………よーし！これで準備万端！……いつでもかかってこいだ！…後は緊張さえしなければぜんぜん楽に読めるぞ！…）

今日もその読みの準備をして、気合を入れてその順番を待った。

キーンゴーンカーンゴーン

（…………あれれれ！？せっかく読み仮名までふって気合入れて待っていたのに…………）

僕の順番は回ってこないで、その社会の授業は終わってしまった。でも成功もなくなつたけど失敗もなくなつたので、本当はすぐほつとしていた。

「はい――今日の社会の授業はこれでおしまい。次は給食の時間で

す。みんなあわてないで準備をしてくださいね！」「

「せりつ・・・れい」

「さあ、おまかせ！」

授業が終わると僕はすぐに飯田君のところに行つて、やれこれやれこれ

6、給食でのお願い

やつてきた！！！給食の時間！！しかも今日の献立は僕の大好きなあげパンだ！！一ヶ月分のメニューが載つている献立表。僕はそれを見ながら毎日毎日、このあげパンの日をすごしく楽しみにしていた。

今日の4時間目までは本当に辛かつた、恥ずかしさの連續。出席に笛のテスト、それに20分休みまで、ほんとに恥のかきまくりだ。でも終わつてしまえばもうそれまで。友達も今は、もう僕の失敗を忘れているはずだ。給食着に着替えた僕はおぼんから順番に給食を取りにいった。

給食にはそれぞれ係りがいる。勝手に多く持つていったり、嫌いなものを持つていかなかつたりしないように、その係りの人人が平等に配つているのだ。今日も、おぼん・おわん・あげパン・野菜炒め・卵スープ・みかんの順番で給食係がいた。大好きなあげパンを配る係りの人・・・・それはお調子者のたけちゃんだ。

「たけちゃん。悪いんだけどさつちの粉が固まつてあるあげパンのせてくれない・・・？」

甘い粉が大好きな僕は、小さめな声でたけちゃんにお願いをしてみた。するとたけちゃんは・・・・

「笛のテストがへたくそなやつの言つ事なんか聞きたくないねえ！」

と嫌な笑顔で言つてきた。

(・・・なんだよたけちゃん!! いじわるだな!! しつかりさつきのテストのこと覚えていやがつた!! ぐわつ! 自分だってぜんぜんへたくそだつたくせに!! ····)

僕が、意地悪なたけちゃんの事を細めで睨んでいると、たけちゃんは···

「そんな田で見ないでよ!! みんなのわがままなんか聞いていられな~いのー。」 しつちだつて係りなんだからわあ···」

と言つて粉の少ない普通のあげパンを、雑に僕のおぼんに乗つけた。

たけちゃんは変に意地悪な所がある。悪気はないのかも知れないけど、意地悪に感じてしまう時があるのだ。僕はなんだかそんなたけちゃんが少し嫌いだつた。それさえなればおもしろいだけのいい友達なのに···

「はい。みんな準備はいいですか? ····では。いただきますをしますよ···はい! いただきます!!」

「いただきます!!」

まあとにかく、おいしくて楽しいみんなの給食が始まった。

給食が始まると、すぐにいろんなみんながあげパンのところに集まりだした。余ったあげパンを取りに行つたのだ。もちろんその全員があげパンをもらえるわけじゃない、数には限りがある。そのあげパンをもらつにはジャンケンで勝たないとダメなのだ。僕も急いでみんなのところに行つてそのジャンケンに参加をした。

「よーし行くよ・・・・・・ジャンケンポイ！！」

みんなで口を揃えてジャンケン開始！結局1回田を勝ち残ったのは、僕を入れた4人だけだった。その勝ち残りメンバーは・・・・僕・のぶ君・五十嵐さん・理沙子ちゃんだ。だけど、残っているあげパンは2つ。まだ全員がもらえるわけじゃない。もう1回ジャンケンで勝たないとならない。

「ぐつそおおおーー絶対食べたかったのにいい・・・・・・」

ジャンケンに負けた給食好きの飯田君が、ものすごい力の入った表情で悔しがった。

「はつはつはつー！」めんね飯田君！でももう1回ジャンケンしなきやだめなのか・・・・・勝てるかな・・・・・あれっ？きよちゃんも残ってるの？これは負けられないなーー！」

のぶ君が頭をかきながら言った。そんな事を言つてゐるけど、あの笑顔さはいつも通りの勝ちを予想してゐるはずだ。その隣では五十嵐さんが興奮しながらジャンケンを手で占つてゐる。

「ふううーふううー・・・・・絶対に負けないーー！」

手と手を絡むように組んでひっくり返し、そのすき間を片田で見る。何が見えるのかわからないけど、なんだかジャンケン占いらしい。男にも負けないくらい大きな五十嵐さんは、占いなんかしなくともなんだかジャンケンが強そうに思えた。僕の横には理沙子ちゃんがいる。

「どうしようつ？ 昨日は負けたから今日は勝ちたいなあ～・・・」

クラスでは一番大人っぽい理沙子ちゃん。すぐさせていて、いつも恋愛話を女友達と話している。豪快で大胆な所もあつたりするけど、五十嵐さんのそれとはまったく違う。五十嵐さんみたいに男っぽいと言つよりはリーダーシップがあつて、積極的。そんな所が豪快で大胆に感じるのだ。そんな理沙子ちゃんは僕とはあまり話をしたことがない、少し遠い存在に感じる女の子。

「よーしー！ ぐわー！ ジャーンケーンぽー！ ！」

のぶ君の声にあわせてジャンケンが始まった。結果は・・・・・ 僕はグー。五十嵐さんもグー。残りののぶ君と理沙子ちゃんは・・・ 手を大きく開いたバーだった。

「やつたー！ 僕の勝ち！ ！」

のぶ君が大喜びをした。のぶ君に負けるのはわかっていた。いつも勝てないのぶ君だから・・・ でも余っていたあげパンは2つ。なんとかもう一つのあげパンを食べたかった。

(・・・・・あーあ・・・・・残念だな・・・・・)

僕が悔しい顔をしていると、隣にいた理沙子ちゃんが・・・・・

「なんか勝つたけどあんまり食べたくないなあー・・・・・きよ君。あげパンあげる。」

その言葉を聞いて、僕は少し驚きながら答えた。

「…………えつ…………ここの？せつかく勝ったのに……」

すると理沙子ちゃんが、首をかしげて少し悩んでから僕に言った。

「うへん。別にいいや……気にしないでー。」

(…………やつたああラッキー！負けたのにあげパンゲットだ！うれしいなー)

僕が興奮をしながら喜んでいると、あげパンをくれた理沙子ちゃんが僕に一步近づき、言ことづらそうに小声で話しかけてきた。

「…………そのかわり、後でお願いがあるんだけど聞いてくれる？」

(…………お願い？いつたいなんだろ。まあ、お願いだからがなんだか知らないけど、あげパンが食べられればなんでもいいか。)

そつ思つた僕は理沙子ちゃんに……

「いいよー何でも言つてーー！」

と大きな声で返事を返した。

「うひうとあーーあげるなら私にうひだいよおおおおーー！」

ジャンケン占いましたのに負けてしまった五十嵐さんが、ものすごく悔しそうな顔でどたどたと足踏みをする。

(いさん時は逃げるが勝ちだー。ちゃんと席に座つてあげパンを食べ

てしまおつー（

僕は自分の席に着くと急いでそのあげパンを食べ始めた。すると・・・

「やああほおおー！」

みかんカゴの前から大声が聞こえる・・・・見ると変な踊りをしながら叫ぶたけちゃんが。

「いえ～い！みかん3つゲットオオー！」

あげパンに人気が集まつて、みかんジャンケンにはぜんぜん人が集まらなかつたみたいだ。少しうやらましくも思つたけど僕もあげパンをゲットしている。まあ今日の所はあげパンだけで我慢しよう。

おいしいあげパンだつたけど2つ全部吃るのはさすがに辛い。おなかがいつぱいで少し余つてしまつた。捨てるのももつたいながらポケットに入つてある小さいビニール袋にあげパンをしまつておいた。

家で食べる給食のパンはなぜだかすゞくおいしく感じる。僕はその余つたあげパンを家に持つて帰る事にした。家の楽しみが一つ増えた。袋にしまつたあげパンを、机の引き出しの中大切にしました。

どんどんみんなが給食を食べ終わる。食べ終わつたら食器の後片付けだ。牛乳パックは1人が上の部分を大きく開いて、残りのみんなのパックを2つ折りで詰め込む。給食の片付けにも係りが決められていた。僕はその牛乳係り。たまに友達の牛乳パックを僕が折り

たたむと、残った牛乳が飛び出して服とか手にかかったりする。少し気持ち悪くていやな係りだ。でも係りだからしょうがないか・・・

7、図書室でのお昼休み

給食が終わってすぐにやつてくる、20分休みよりぜんぜん長いお昼休み。僕にとってこのお昼休みは大切な時間だ。

「 もちちゃん……またデジジボールやるの? 」

のぶ君が20分休みの時みたいに、ボールを持つて僕のほうにやつてきた。

「 ……」めん、のぶ君。お昼休みはやめとくや・・・

すごく楽しいデジジボール、だけどお昼はいつもやらない事にしている。なぜかといふと、僕はお昼休みを別の楽しみに使っていたからだ。大切な僕の時間・・・・・心を落ち着かせる事ができる大切な僕の場所・・・・・

静かで物音がしない部屋・・・・・窓から入る陽の光が部屋いっぱいに広がつて・・・・・
すごく暖かくて・・・・・すごくきれいで・・・・・

僕は昼休みに、必ずこの図書室へと来ていた。この図書室と言つ場所は、なんだか他とは違う特別な雰囲気がある。心が温まる特別な雰囲気。僕はその雰囲気がすごく好きで、いつもいつも本を読みながら、外の景色とか周りのみんなを見て静かにその時間を使っていた。

(もちーーー今日も昨日読んでいた本の続きを読もうーー)

僕は昨日から見ている「日本の歴史3」を手に取った。

本当に読書が好きな人は、なんだか難しい本を読んだり厚めの小説を読んだりしている。でも僕は、そんな文字がいっぱいの本が好きわけじやなくて、この部屋の静かさと他の教室と違う雰囲気が好きなだけだ。だから読む本はいつもこの「日本の歴史」。中を開くと細かい字もいっぱいあるけど、途中におもしろい漫画があつたりする。僕の目的はその漫画の部分。家で新聞を開いたりする。でも目的は4コマ漫画だけ。僕はこの歴史の本も、その新聞と同じ使い方をしていた。

「さよ君……」

(・・・・・?)

呼ばれて振り向くと奥にある図書室の入り口に誰かが立っているのが見えた。よく見るとその子は、わざと給食の時間にあげパンを僕にくれた理沙子ちゃんだった。

(あつそうだーそつにえばわっせ、給食の時に何かお願ひがあるつて言つていたな・・・・そのお願ひを言つにきたのかもしれない・・)

僕は席を取られないように本を開いて机の上に置いた。そしてすぐに理沙子ちゃんのほうに歩いて行く。

「理沙子ちゃん」めん。わざと言つたお願ひの事だよね。

それを聞くと、理沙子ちゃんは・・・

「うん。 わうなんだけど…………」

そこまで言つと理沙子ちゃんは、なんだかばずかしそうにもじもじしながら下を向いてしまつた。そして、少しの時間を置いた後、またその続きを話し始める。

「…………あのわ…………」
から今田の帰りに話してもいい?…………」

なんだかいつもと雰囲気が違う理沙子ちゃん。いつもは他の子より大人っぽくてはきはきしているのに、今日は何だかすこく女の子らしい表情をしている。そんな理沙子ちゃんを見て、なんだか僕は少しどきどきしながら返事を返した。

「べつ…………別にいいよ…………」

それを聞くと、理沙子ちゃんはうれしそうに答えた。

「…………やつた!…………それじゃあ……今日一緒に帰るー」

…………帰りを誘われてすぐ驚いたけど、すぐにOKと答えた。

(??理沙子ちゃんはいったいなんの話があるんだ?もしかして僕のことが好きなのかな??告白ー??まさかね…………)

はじめ聞いた時はちよつとしたお願いだと思っていたけど、なんだか大切な事みたいで少しそのお願ひが楽しみになってきた。

話も終わったので、席に戻つて本の続きを見る事にした。「日本の歴史3」ももうすぐ終わり。今日中に次の歴史を読んでみたい。毎日毎日少しづつ進んでいくその内容が、僕にとつてはすごく樂しみ。早く進めたいその内容。僕は漫画を読んでいるところより、目を通しているというスピードで、とにかく次から次へとページをめくらまくった。ふと時計を見ると、もうお昼休みになつて20分近くもたつていて。

「…………遅いなあ恵美ちゃん…………」

独り言を言った。

僕がこの図書室に来る理由。本当は、特別な雰囲気や読書だけがその理由じゃなかつた。そのもう一つの理由、それが隣のクラスの恵美ちゃんだ。

僕と同じく、必ずお昼休みに図書室へやつてくる恵美ちゃん。メガネをかけて無口でおとなしくて、内気な性格。もちろん趣味は読書だ。でも勉強がものすごくできるわけじゃなくて、レベル的には普通。運動はすごく苦手。背が小さくてかわいらしくてやさしい・・・。僕はそんな恵美ちゃんに会える図書室がすごく大好きだつた。恵美ちゃんと一緒にいるとすごく心が癒される。嫌なことも悩みも全部忘れる事ができる。気持ちがいい雰囲気の図書室とやせしい恵美ちゃん。僕はその2つを感じられるお昼休みをとにかく楽しみにしていたのだ。

そんな恵美ちゃんは給食を食べるのが大の苦手だ。好き嫌いが多い恵美ちゃん。給食は必ず全部食べるのが学校のルールだ。食べるのが遅い子とか好き嫌いが多い子は、そのお昼休みの時間まで使って給食を食べさせられた。今日もその恵美ちゃんは、給食が長引いて

しまつて図書室に来るのが遅れてしまつている。いつもなら10分もたてば来るはずなのに、今日はまだ来ない。僕は少し恵美ちゃんが心配になってきた。

「清正君…………」めん…………待つた？」

声を聞いて後ろを振り返ると、その心配をしていた恵美ちゃんがいつの間にか僕の真後ろに立っていた。

「あつ恵美ちゃんー遅かったね。心配したよーどーしたのー?」

「うん。苦手な野菜炒めがあつて…………それで…………」

「

「あつ…………そうだったんだ。それならじょうがないね!ほ
う早く本読まないと時間なくなっちゃうよー」

恵美ちゃんがやってきて一安心。いろんな話をしながら、僕の大好きなお昼休みの時間を2人で仲良いいっぱい楽しんだ。

長すぎる一日。ほんとに今日は長かった。思い出してみると、今日は失敗がすゞく多かった。まつそれはいつもの事だけど……やつとその全部が終わって、今は帰りの下校道。朝来た道をそのまま戻る。今日も、のぶ君と一緒に帰ろうと思つて元気にのぶ君を誘つてみた。するとのぶ君はすゞく申し訳なさそうな顔をして……

「『めん・きよちやん・今日は学級委員の仕事で学校に残らわいやい
けないんだよね。』」

と黙つて断られてしまった。今日は寂しく1人の帰り道。

校門を抜けると、さつきまでいっぱいいた下校の子達もいなくなってしまった。住宅街が並ぶ長い一本道、一人で寂しくとぼとぼ歩く。のんびり歩いていると、少し怒った言い方で僕を呼び止める声が聞こえた。

「さみ君！…………さみ君がひよつと待つてよ。」

そこには僕のクラスの理沙子ちゃんが立っていた。

(・・・・・あつそうだ！今日は理沙子ちゃんと帰る約束をしてたんだつけ・・・・そういえば、お願いがあるとか言つてい
たな・・・・・)

お昼休みにあれだけ念を押されて、それでもその事をまた忘れている僕。理沙子ちゃんが怒るのもわかる。

「じめん。理沙子ちゃん。忘れて先に帰つてた・・・はつはつ・・・
・・はつ・・・」

なるべく怒らせないよう、その台詞を言つたつもりだった。それでも・・・

「もーーきよ君、忘れないでよー！」

やつぱりひどく怒られた。続けて不思議そうな顔で僕に聞いてきた。

「あれっ？？今日、のぶ君は？？」

それを聞かれた僕は・・・

「あ～今日は学級委員で学校に残らなきゃいけないんだって・・・それで一緒に帰れなかつたんだよね。」

すると理沙子ちゃんは、なんだか寂しそうに・・・

「へー・・・・そ～なんだ・・・」

と答えた。

恋愛話が好きで大人っぽい理沙子ちゃん。そんな理沙子ちゃんのお願いを、僕はすごく楽しみにしていた。それでも僕は焦らずに、なるべくその本題には触れないように、2人で楽しい下校を楽しむ事にした。

2人でいろんなぐだらない話をしながら帰り道を楽しむ。帰りの坂

道、2人で競争。僕が勝つて理沙子ちゃんをバカにする。その坂道が終わると今度は毛虫がいっぱいいる木がある。その木の下には毛虫の死骸がいっぱいあった。その死骸に向かって2人で押し合つて騒いで通る。理沙子ちゃんに強く押されて、僕が毛虫の木の真下に。そこにある死骸を踏まないように、うまくかわして通り抜けた。そんなくだらないやり取りをしながら2人で楽しく歩き続ける。なんだからすぐませていて、少し気も強そうで・・・・普段はあまりしゃべらない理沙子ちゃんだったけど、なんだかこうしてしゃべつてみると普通の子。というよりも、なんだか他の子よりもしゃべりやすく感じられた。

イメージと違う理沙子ちゃんの印象を感じながらいろんな会話をして歩いていると、いつもより帰り道がぜんぜん早く感じられた。見るともう、僕の一番好きな富士山が見える丘についていた。そこには夕日に変わりそうな太陽の中、まだまだ元気な富士山がはっきりと見えていた。疲れてあまり会話がなくなってきた2人。その丘から富士山を見ながら、無口になつたまま静かに歩き続けた。すると理沙子ちゃんが、落ち着いた表情でゆっくりと僕に話しかけてきた。

「そうそう、それでわ・・・給食の時に言つたお願いなんだけど・・・」

ついに本題が始まった。待ちに待つた理沙子ちゃんの僕へのお願い。

図書室の時、理沙子ちゃんはなんだかはずかしそうに僕と話をしていた。もしかしたら僕のことが好きなのかもしない・・・・あの時僕はそんな風に感じていた。なんだか少し期待が高まる。理沙子ちゃんが僕に告白をするのではないか・・・・そんな期待が高まっていた。

「実はや……私……のぶ君のいじが好きなんだよね……
……」

…………完全な勘違い。予想通りの恋愛話だつたけど、僕じゃなくてのぶ君への告白。まあ、そんなもんだろ?と思つてはいたけど……でも実は、いつも楽しそうに騒ぎながら恋愛話をしている理沙子ちゃん達がすこしうらやましかった。なので、僕もその話題に入る事ができただけじゃなくうれしかった。

「あつ・・・・・そつなんだ・・・・のぶ君かっこいもんね!」

興奮も驚きもしてこないふりをして、つまく答えを返した。でも本当は心がどきどき。あの理沙子ちゃんが好きな男子は……なんと、のぶ君だったのだ!そして理沙子ちゃんが続けて僕に言つてきた。

「それでさつ・・・・きよ君ひでのぶ君と仲がいいよね?だからなんとかしてくれないかな~って思つてさ・・・・」

これが理沙子ちゃんの僕へのお願い。2人をくつつけてほしこと言つただ。でも、やつこいつ恋愛話が苦手な僕は……

「・・・・・・・うへん。なんとかつて言つてもね・・・・・・」

「

言葉に詰まつた。言葉に詰まつてると理沙子ちゃんが・・・・・

「ねーねーその前にやーのぶ君つて他の好きな子いるの?~

びざざせめてへる理沙子ちゃん。やっぱりやつこいつ話には慣れて

いるだけあって、新しい言葉がどんどん出て来る。

「えつ・・・・・え、～・・・・ 好きな子って・・・・ そんな話のぶ
君とした」とないしな～・・・・・」

なれない話の内容で、僕は言葉が詰まつてぱっかり。僕がおどおどしていると、続けて理沙子ちゃんが驚きの一言を僕に言つてきた。

「それはヤーと、 わよ痴つにセー。 綾ひやんの事が好きなんだしちゃ
ね～一々。」

焦つた僕は、早口みたいなあたふた声で答えを返す。

「なつ・・・・なに言つてんだよ理沙子ちゃん！－！なつなんでそん
な」と・・・・・

ばればれのあわて方。はずかしすぎて耳まで赤くなつてきた。

「くつへへ。さよ離みてればわかるわよつ。そんなの」

（・・・・・なんでわかるんだ？？？僕はそんなにも綾ちゃんが好きなことを表に出していくのか！？）

「じゃあ、きよ君が綾ちゃんを好きな事は黙つていてあげるから、何とか私とのぶ君の事をくつつけてよね。それじゃあーまた明日ー。」

・・・・と完璧な捨て台詞で帰つていった。

(・・・・・ばれていたのか、僕が綾ちゃんの事を好きな事・・・
理沙子ちゃんが気付くって事は・・・・まさか綾ちゃんも気付いて
いる?・・・・・そんな事はないよな・・・・・)

1人になつた帰り道。夕日に変わつてしまつた太陽を横に、深呼吸をしながら心を落ち着かせた。やつと心のどきどきが消えてきたので、もう一度ゆつくりとそつきの理沙子ちゃんとのやり取りを思い出しあげた。

考えれば考えるほど心配になつてくる。その「綾ちゃんの事が好き」だというばればれの態度・・・いつたいどんな態度だつたんだろう・・・。

(もう一々 お詫び 田中 から は 綾ちゃん の 事 を あまり 見な こよ
い し まへ 一々)

どんな態度が悪かったのかがわからない僕は、とりあえず「綾ちゃんを見つめてしまつ」という行動をとらない事を決めた。

僕は、綾ちゃんの事が好きな事を絶対に誰にもばれたくないなかつた。
誰かに「学校で好きな子いるんでしょ？」とか「誰が好きなの？
？」とか聞かれても、僕は必ず「好きな子はないよ！」と答えて
いた。なぜなら、それはばずかしがりやだから。自分が好きな子を
他の誰かが知つてしまつたら・・・・もしかしたら僕は不登校に

なつてしまつかもしれない。

そんないろいろなことを考えながら歩いていると、家までの距離がすぐ短く感じられた。本当に明日からの態度には気をつけないと…。
・・なんだか学校へ行くのがすぐ辛く、はづかしく感じた。

9、避難訓練でのアクション

今日もこつもの通学路を歩く。前を歩く2年生の女の子、今日は赤い傘を持っている。予報では午後に雨が降ると言っていた。でもなんだか空を見ると天気が良くて雨なんか降らなそうな気がした。何もしゃべらないで歩く通学路。今日も頭ではいろんなことを考える。

先週、理沙子ちゃんに・・・「綾ちゃんの事が好きなんでしょう?」と言われた。それから、この一週間は綾ちゃんを意識しないようにする事に全力で頑張った。それでもたまに見てしまつ綾ちゃんの顔。やっぱりまた意識しないのは難しいみたいだ。

(あ～あ・・・気にしないなんて無理だよ。綾ちゃんも僕の事を好きでいてくれればいいのににな・・・回思いになりたいな・・・)

意識をしないように・・・意識をしないように・・・そう考えていると、逆にその綾ちゃんの事を考えすぎてしまつ。なんだか空回りしているみたいな不思議な毎日を送っていた。

あれから、理沙子ちゃんにのぶ君の事を言わたることはなかった。でも、理沙子ちゃんがのぶ君の事を好きだと知つてからそういう田で理沙子ちゃんを見ていると、なんだかのぶ君の事をすごく気にしているのが良くわかる。やっぱりみんな好きな子を見てしたり、近くにいたりそんな動きをしているみたいだ。僕も今までそんな風に見られていたのかも・・・そう考えるとものすごくはずかしく思えてくる。僕はあの日から・・・

(綾ちゃんを見てしまうのはしょうがないけど、なるべく近くに行つたり、しゃべりかけたりはしないようにしていこう……)

と心に決めていた。

学校に着いた。いつも通りに始まつた今日の通学路。でも今日は、そのいつもとは違う大切な大イベントがあつた。それは・・・・・・

避難訓練。

勉強の授業を思いつきりつぶしてみんなでわいわい楽しいイベントだ。避難訓練は3時間目。避難訓練の時間が楽しみな僕は、その時間が来るのをドキドキしながら待ち続けた。

「はい！次の授業は避難訓練です。いいですか！？」予定では後20分後に地震が起きて、給食センターから火災が発生します。心して待つように・・・・・その前に、地震が発生してからの動きと避難経路を説明します。いいですか・・・・・まず・・・・・・・・・・・・

ついに始まつた避難訓練。先生の話によると・・・・まずアナウンスによる地震が発生。「ただいま震度5の地震が発生いたしました」そしたらすぐに机の下に隠れる。その後、非常ベルがなつて、もう一度アナウンス。「ただいま、給食センターより火災が発生いたしました・・・・」それを聞いたら廊下に整列。先生の指示にしたがつて校庭に行く。この時だけは上履きのまま校庭まで行つてもいいみたいだ。なんだかドキドキの大イベント。

(どーしょー楽しみだな・・・・・)

時間が近づいてきて、何だか変な緊張までしてきた。

「はい、そろそろ地震が発生しますからね・・・・いいですか・・・・

・・・

先生の言葉を聞いてみんなもなんだかそわそわしてきた。やつぱりみんなも避難訓練が楽しみみたいだ。そしてついに、少しづわついでいた教室に、避難訓練の始まりを告げるアナウンスが流れ始めた。

「ただいま震度5の地震が発生いたしました……。ただいま震度5の地震が……」

「地震が発生しましたよ……早く机の下に隠れて……」

アナウンスが流れるごとに、すぐに先生がみんなに向かって叫んだ。それを聞いたたけちゃんは……

「うわうわうわああああ～ビーしょおお～！～おつおかあさん～！～！」

興奮しながら、また変なダンスをしてみんなを笑わしている。

「ひー早く隠れなさい……」

先生が出席簿でたけちゃんの頭を軽くたたいた。机の下に隠れるみんな、いつもとは違う不思議な光景だ。机の下に隠れて周りを見てみると、いろんな消しゴムのかすとかえんぴつ、「ミミなど」が散らばつていた。

いつも思うのが飯田君の席。その飯田君の席の周りにだけ、なぜだかいろいろな「ミミ」が落ちている。机の周りを見るだけで、その人の性格とか今までわかつてしまつ……ジリジリジリジリジリイイイイ・・・・・

「ただいま・・・給食センターより火災が発生いたしました・・・
ただいま給食センターより・・・」

「うわうわうわああああ～今度は火事だああああ～おしご
もらじきゅうよつおおおおお～！」

股に手を当てて叫ぶたけちゃんを見てみんな大笑いだ。笑いながら
僕達はすぐに机の下を飛び出して、廊下に整列をした。廊下に出る
とびっくり・・・・廊下は、本物っぽい火事の煙でいっぱいにな
っていた。

(なんだこの煙は・・・先生達も気合が入っているな・・・
)

廊下には小さな缶詰みたいのがいつぱい置いてあった。先生達が
準備していた煙を出す特別な道具。そこから吹き出すものすごい量
の煙。

「はい！～移動しますよ！～準備はいいかな！～？」

そんな僕達の驚きを無視して、忙しそうに先生がみんなに言った。
校庭への移動開始だ！！

「う・・う・・う・・う・・わ・・あ・・あ・・あ・・あ・・あ・・た
ゞ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

たけちゃんがスローモーションになつた振りをして、ものすごいゆ
っくりと走る動きをしている。何が何でもみんなの事を笑わせたい
みたいだ。

「いいかげんにしなよーたけちゃん！－」

横でのぶ君がまじめに怒った。やつぱりしつかりしていてかつここのぶ君。あれあれ！－？きれいに2列で並んでいたのに、いつの間にか理沙子ちゃんがそののぶ君の横に引っ付いて肩を並べている。

「そうよねーのぶ君。早くここー！－！」

そう言って理沙子ちゃんは僕の方をちらりと見て、田字圖をした。
・
・
・
・

「の間の帰り道での約束・・・」「のぶ君と理沙子ちゃんをつましくよくさせることを今実行しなさいーー」と田字圖の田字圖をした。

だ。それを見た僕は思い出したよ
・
・
・
・

「あー・・・・・ああのぶ君、そつだよーーはつ早く行つたほうが多いよーーほりー理沙子ちゃんと一緒に田字圖をした。

と焦つて少し強引氣味な台詞をのぶ君に言つてしまつた。それを聞いたのぶ君は・・・

「え？？うんでも・・・・列乱れちゃつて一列を作り直さないと！理沙子ちゃん！早く先行つて自分の場所に戻りなよー！」

と理沙子ちゃんを前に押していく。のぶ君に押される理沙子ちゃんは・・・

「あ・・・・わつわつよね・・・・『めん先行くねーのぶ君・・・

と言つと僕に（何やつてんのよ、きよ君ー）こう冷たい目を送りながら、先に進んでいった。

結局離れ離れにされた理沙子ちゃん。力になれなかつた僕。せつかく理沙子ちゃんが僕の事を頼りにしてくれたのに・・・ほんとに情けない。

それにもしても、理沙子ちゃんはどれだけのぶ君を好きなのか・・・はずかしさもなく、自分からそののぶ君に近づいていった。なんだかそんな行動を堂々とできる理沙子ちゃんがすゞしうりやましかつた。

（僕にはあんな事はできないな・・・綾ちゃんに近づいていつて肩をくつつけるなんて・・・うわっ何を想像しているんだ！！！はっはっかしい！！）

変な想像をしてテレつながら両手をばたばたさせながらその妄想を消す僕。そんな僕が妄想から現実に戻ると、並んでいた列はもう乱れまくつていて、どこに誰がいるのかもわからないくらいになつていた。しかもものすゞしうる煙の量。進めば進むほど煙が多くなつていつて・・・もうここは、前がまったく見えないぐらいになつてゐる。

（いいまでやつてほんとこいのー？？）

僕はあまつにもすゞしうる煙を見て少し心配になつてきた。すると・・・

「ちゅっ・・・・・ちゅっとみんな大丈夫か！？？けつ怪我するなよ

！..」

遠くで先生がその煙に焦つて、みんなを探し回っているのが目に入
った。先生があわてるほど危険な状態。そんな中、前に進むと・・・

(・・・・)「わ、なんだよー!」(は階段じゃないが!)

すごすぎる煙で、まったく気付かなかつた階段。もう足元に何があるかもまつたくわからない。

（「いくらなんでもすゞすきるよー！？？？ほんとに大丈夫？？？」
・・・・・・・）

僕がそう思つたその時。

「ややあああ・・・・・」

(・・・・・・・・・?)「の声は・・・・綾ちゃん!-!-!」

横でした綾ちゃんの声に振り向くと、煙で前が見えなくなつて階段で転んでしまつている綾ちゃんがそこにいた。あわてる僕。とっさに・・・ほんとにとっさに何も考えず、その綾ちゃんを起こしてあげている僕がいた。自分の行動に自分で焦る。はずかしがりやのこの僕が、綾ちゃんにそんな事をしているのだ！しかも僕はなんと、その綾ちゃんと手と手をつないで起こしてあげていた！

(・・・?/?「うわ・・・・・うわああ～はずかしい～・・・・・なつなにやつてんだよ僕は・・・・)

「あつあああ・・・・・だつ大丈夫！！？？綾ちゃん」

僕は赤くなりながら裏返りそうな声で綾ちゃんにしゃべりかけた。
すると・・・・・

「あつ・・・・・うん、大丈夫・・・・・」

・・・・・と綾ちゃんは言つて、一瞬だけ僕を見るとテレながら先に階段を下りていつてしまつた。

(うわあああ～どーしょー！なんてバカな事をしちやつたんだ！
！あの綾ちゃんの手を握つてしまつた！！！はずかしいはずかしい
はずかしい！…………ばかばかばかばか！…………しかもやさしくかつこいい台詞が言えればいいのに、あわてて言つた。
・・「だつ大丈夫！？？」の台詞。ぜんぜんかつこよくもなんともないよ～！！！うわあああ～今の行動、みんなに見られてない
かな・・・・・)

僕は心の中でその全部をはずかしがつた。そして何よりも、はずかしがりやの僕はその出来事を他のみんなに見られていなかがすごく気になっていた。校庭に着いた僕。校庭ではもう、みんながきれいなはじめの2列を作つてゐる。すると僕を見つけた五十嵐さんが・
・・・

「あつ～きよ君！～」

いきなり大声の声かけ！

(もしかしたら、さつきのはずかしい出来事を五十嵐さんは見ていたのかもしれない・・・)

僕は妙にその五十嵐さんの顔が何かを知っているような・・・そんな表情に見えた。そんな怪しい笑顔で僕に詰め寄つてくる五十嵐さん。僕はあわてて五十嵐さんに言つた。

「へつ……なつ……なに……？」

悪いことをした後みたいに何だか不自然なしゃべり方だ。それを聞いた五十嵐さんが続けて僕に言つてきた。

「も～…きよ君、どういたのよ…！途中からどうにも居なかつたから心配したじゃない！…さがしたのよお～…！」

（へつ・・・・・な～んだそういふことか・・・・・よかつた、五十嵐さんは見られていなかつたみたいだ・・・・・）

ほっと一安心。そして他のみんなを見てみると・・・・・みんなもこつも通りの普通の会話をしている。

（・・・・・ふ～助かった・・・・・・・・・・・）

僕はいろんなみんなをきょろきょろ見ながら、心の底から安心感を味わつた。

校長先生の話と、消防署の人的话が始まつた。だけどもうそんな話はどうでもよかつた。ただたださつとき起こつた綾ちゃんと僕との出来事を、頭の中で繰り返し思い返した。階段をおりる僕。横で転ぶ綾ちゃん。手を握つて起こしてあげる僕・・・・・立ち去る綾ちゃん・・・・・何回思い出してもはずかしい・・・・・そんな事を考へてる僕は、いつもより何度もちらちらと綾ちゃんを見てしま

つていた。

(れいの事、綾ちゃんはどう思つてゐるんだろう・・・?)

何度も何度も綾ちゃんを見ていると、なんだか綾ちゃんもひつむけをちらちら気にしているように感じる。たまに田と田が合づ僕と綾ちゃん。

今までは僕が綾ちゃんを見るだけだった。ただただいつも綾ちゃんの横顔を見るだけの毎日だった。だけども今日は違う。綾ちゃんもこつむけを意識してくれている。いい風に考えれば、綾ちゃんが僕に興味をもつてくれているという事。なんだか少し進歩したような・・・

・・発展したようなそんな気がした。
はずかしいはずかしいと思つていたさつきの行動も、なんだか今は正しい行動だったと思える。

(・・・よくやつたぞ、清正!!今まで一番綾ちゃんと大接近したぞ!!そのままがんばれ!清正!!)

・・・僕は心の中で、積極的だつた自分を興奮しながらほめ続けた。

10、腕相撲大会

一清正君

(綾ちゃんの声・・・・・・・すゞしく柔らかかったな・・・・・もう一度あの時に時間を戻せたらな・・・・)

「ねー清正君ーー！聞いてるー清正君？！」

驚いて横を見るとメガネの恵美ちゃんが、大好きな小説を開きながら少し怒り顔で僕を見ていた。

今は昼休み。僕は静かな暖かい図書室で、ボーッと避難訓練での綾ちゃんとの出来事を思い出していた。

「清正君どうしたの！？本も開かないでボーッとして・・・」

恵美ちゃんがそんな僕を見て不思議そうに言った。続けて恵美ちゃんが・・・

「私のさつきの話聞いてた？・・・」

・・・・・ そう聞かれた僕は・・・・・

「えつ・・・なんだつけ！？」

避難訓練の事を思い出していた僕は、その恵美ちゃんの話をまったく聞いていなかつた。そんな「？」を飛ばしながら首をかしげる僕を見て、恵美ちゃんが強めの言い方で言つてきた。

「さつき話した腕相撲大会の話だよ！私のクラスで一番腕相撲が強かつたのは、雄大君だつたつて話。」

（・・・・えつ・・・腕相撲？）

苦手なことが多い僕のたつた一つの特技、それが腕相撲。隣のクラスの恵美ちゃん。そのクラスでは「みんなの時間」を使って腕相撲大会をやつたみたいだ。

「私のクラスの担任の小島先生と、清正君のクラスの担任の佐藤先生つてすごく仲がいいよね？だからもしかしたら清正君のクラスの『みんなの時間』でも腕相撲大会やるかもしれないよ」

次の授業がそのみんなの時間。

「みんなの時間」という時間は、いつもは勉強でできない大切な事をする、週1回用意された特別な時間だ。学級委員を決めたり、席替えをしたり・・・・いろんな事をする。勉強じゃない楽しい時間。その時間を使って、今日は腕相撲大会をやるかもしれない・・得意な腕相撲。いつもはかっこ悪くて、はずかしい失敗で目立つてしまう僕だけど、もし腕相撲大会をやつたとしたら、かっこよく目立つことができるかもしない。避難訓練での前向きな行動。今日の僕は、いつもよりも自信があつた。そんな僕は、もしかしたらやるかもしれない腕相撲大会だけど、なんだかそのみんなの時間がもの

す”く楽しみになってきた。

「はい……今日のみんなの時間は・・・・・・・腕相撲大会です！――！」

(やつたあああああ！――予想通りの腕相撲大会！――)

授業がはじまるチャイムと一緒に言つた先生の一言に、僕は小さなガツツポーズをとつた。

ルールは簡単、トーナメント制だ。2人ずつ順番に黒板の前にある先生の机に行つて、その机をはさんで勝負がスタート。勝負をしている机の裏にはそのトーナメント表が書かれている。そして勝ち上がると先生がそのトーナメント表に、赤いチョークで線を引いていく。

(・・・・・よしつ！見せ所だぞ！――・・・・・)

僕はその順番を心待ちにした。

いろんな友達がいろんな子と対決をしていく。負けて悔しがる子、勝つてガツツポーズを決める子、その時だけはその2人だけにみんなが注目をする。僕にとっては1番の見せ場だ。そしてついに僕の順番が回ってきた。1回目の勝負。先生の机の前まで行つて、片腕を置いて準備をする・・・・・・

「・・・・・レディー・・・・・」――！――

先生の合図で勝負が開始。始まつてすぐに、僕は相手を簡単にぶつ倒した。

「つおあ・・・・・すげえ・・・・・」

いつもは笑わしているだけのたけちゃんが、僕の腕相撲を見てめずらしく素直な驚きの言葉を言った。そんなたけちゃんを見て僕は思つた。

(これはいい所までいそうだぞ・・・・・)

腕相撲大会はどんどん進み、さつき僕の強さに驚いていたたけちゃんの順番が回ってきた。相手は不幸にもあの五十嵐さん。

大きく膨らんだ。

「いへわよおおーーーたけちゃんーーー！」

どんどん敗れていく女子達。そんな中、五十嵐さんだけは順調すぎる勝ち上がりを見せていた。

「ひょええええ・・・・・五十嵐かよ・・・・・きついなあーーー・・・・・

「・

腕をまくつて気合を入れる五十嵐さんを見ながら、たけちゃんは弱気な発言をした。たけちゃんも腕相撲が弱いわけじゃない。かなりの力を持っている。そんなたけちゃんだけど・・・・・

「いひでててててーまいつたーまいりましたーーー！」

・・・・五十嵐さんの圧勝で勝負が決ました。

(・・・・やばい・・・・)

黒板のトーナメント表を見ると、次の僕の対戦相手は、なんとその五十嵐さんだ。あの強さを見ると、優勝するには必ず戦わなければならぬ相手。それが早いか遅いかの違いだ。深呼吸をして冷静に、焦らずその対戦を待つた。

どんどん進んでいく腕相撲大会。強いのはやっぱり優勝候補ナンバーワンののぶ君。なんでもできるのぶ君は、うますぎる試合運びで順調に勝ち上がった。そしてもう1人の優勝候補、太っている飯田君。飯田君はどんなに弱い相手でも、太い腕を使って容赦なくねじ倒す。あっさり負けてしまったのがデブヤセコンビのもう1人、やせの山田君。無口で目立たない山田君も、なぜか飯田君の試合になると細い力のない大声で飯田君を応援していた。

進んでいく腕相撲大会。黒板のトーナメント表は、もうかなり上のはうまで来ていた。そのトーナメント表を見ながら、先生のうれしそうな一言。

「さあ!! 次は大一番だね!! どっちが勝つのかな??」

ついに五十嵐さんの対決の時が来た。もう一度深呼吸をする僕。

「・・・・・ふ・・・・・」

そして黒板の前に行つて、その五十嵐さんを見上げる。相変わらず僕より大きいその体。いつも僕はその五十嵐さんにバカにされて……
・いじめられて……辛い毎日を送っている。僕は心の中で……
・・・・・

(・・・・・今日は負けないぞ・・・・・)

と言い続けた。そしてその五十嵐さんの手を握る。握つてビックリ、あの綾ちゃんの暖かくて柔らかかつた避難訓練の時の手とは違つて、ごつつくて大きな男らしい手。握るだけでその強さがビシビシ伝わつてくる。

「準備はいいかな？・・・・・レディー・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ゴーーー！」

先生の合図、勝負が始まった！！

「ふん！…！」

五十嵐さんの男勝りの太い声！その声とともに勢いよく僕の手を押し倒しに来た！・・・そんな五十嵐さんの力を手で感じて・・・・・僕は思つた。

(・・・・・僕は腕相撲が本当に強いんだな・・・・・・・)

心で思う本音の気持ち。あんなに強かつた五十嵐さんも、やつぱりこんなもんだったのだ・・・・正直にその五十嵐さんの力が、僕には弱弱しく感じられた。僕は余裕の笑みを見せながら、その五十嵐さんを簡単にねじふせた！！

「えつ・・・・・・え、～！～！～！」

教室に響き渡る驚きの声。みんな僕の余裕すぎる勝ちを見て驚きの・・・・・・尊敬の声を上げた。

(・・・・・ いける。今ならいける！)

僕の自信は確かなものになつた。

(「このクラスの優勝は必ず僕がものにしてやる!—今日こそはいつものかつこ悪い目立ち方と違つて、かつこよく目立て見せる!—)

いつもより堂々とした歩き方で歩いて どんづ と自分の席に座る。そして腕を組んで、目を閉じて、また自分の対戦を待つ。あの飯田君やのぶ君もそんな僕を見て、目を大きく丸くさせた。

「シトヤー・・・・・・・・」

・・・・・ わつきまで騒いでいた教室のみんなが一気に静まり返る。ついに始まる、飯田君とのぶ君の直接対決。その結末にみんなそろつて息をのんだ・・・

勝負が始まった！・・・・・ビシッ・・・と止まる2人の動き。震えてどつちにも傾かない。名勝負だ！-じりじりじりじり時間がすぎる。何も起こらない数十秒間。長すぎるその時間を動かしたの

は・・・・・・・のぶ君だつた。

ゆうべり・・・ゆうべりとその手が傾き始め。あの飯田君が押されていふのだ。

静かな教室に、飯田君の親友、山田君からの心のこもった応援が響いた！それを聞いた飯田君が踏ん張りながら一言・・・

押し戻そうと粘っていた飯田君だつたけど、一気に力が抜けてのぶ君に負けてしまった。

「おうお～！～～～～～」

教室に響き渡るみんなの声。これでのぶ君は決勝進出決定だ！！

「…ああせしり」

のぶ君がかっこよくガツツポーズをとった。そんなのぶ君を女子達は憧れの目で見つめていた・・・・・

相変わらずかっこいい親友のぶ君。1番がのぶ君で2番が僕。そんな関係がずっと続いていた。僕はいつもそんなのぶ君をうらやましく思っていた。憧れ続けていた。でも今日の僕は今までの僕とは違う・・・・・

・・・・ひやましいというよりはむかつく・・・

いつも僕の心の中に隠れていた本音の気持ち。それは・・・・・

(なんで僕はのぶ君に勝てないんだ?・・・・)

僕はそんな気持ちを持ちながら、負けてもいつも笑顔でへらへらしていた。それはのぶ君に負けて当たり前だと思つていたからだ。だから笑つてごまかす事しかできないでいた。でも今は腕相撲。僕のたつた一つだけ得意な腕相撲だ。ついに・・・・・ついにのぶ君に勝てるチャンスがめぐってきたのだ。ここだけは僕が目立ちたい。僕がヒーローになりたい。絶対にのぶ君に勝ちたい!かつこよくボーズを決めるのぶ君を見て、僕は心の底からむかついた。

僕の準決勝は簡単に終わつた。もちろん僕の圧勝。僕にはもうのぶ君しか映つていなかつた。いつも一番ののぶ君、負けてしまう僕。そんな2人が今決勝の舞台に上がつた。間違いなく、のぶ君も今までにない僕に対する恐さを感じているはずだ!!

(腕相撲じゃなきや勝てるのに・・・今日は負けてしまうかも・・・

)

そんな気持ちを持つてゐるはずだ!一言もしゃべらず、そののぶ君と目と目をかわす。いつもは仲良く笑顔の2人、でもこの時の2人にはまったく笑顔がなかつた。かわした目と目は睨み合う目。完全に敵。対決の机を2人ではさむ。仲のいいのぶ君・・・・僕の親友だ。ずっと心の中に持つてゐたその親友とは違うもう一つののぶ君

の存在

・
・
・
・
・

・・・・・ライバル・・・・・

一瞬目を閉じて大きく深呼吸した。そしてゆっくりとそののぶ君の手を握る。何回も握りなおす手、自分の一番いい握り方をしたいからだ。

(・・・・・絶対に負けられない・・・・今回だけは・・・・今
回だけは・・・・・)

心臓の音が、何もしていしないのに聞こえてくる・・・・・

『新編 五十年史稿』

「…………もう待ったなし。周りの友達がいろんな言葉で応援しているけど、そんな声はもう僕には聞こえていなかつた…………！」

運命の勝負が始まつた。

11、腕相撲大会決勝戦

固まつて動かない2人の手。

さつき、強敵の五十嵐さんを簡単に倒した僕は、圧勝を狙つて最初から全力でのぶ君に挑んだ。それなのに、まったく動かないのぶ君の腕。震える2人、力はまったく互角だ。

・・・・・苦しむのぶ君。この僕があののぶ君を苦しめているのだ。
僕にとつてはじめは、クラスで1番とみんなの注目が目的だった。
でも今はもうそんな事はどうでもいい。目的は一つ。

・・・・・動きが固まつてからどれくらいの時間がたつたのか・・・・・僕にはまだ、余力が残っていた。腕相撲で勝つコソ、「相手の体力を奪う！」それだ。この余力をえべ必ずのぶ君に勝てる！！僕はその力を使うタイミングをずっと待ち続けた。

(・・・・・よし！今しかない。)

と思つたその時だつた・・・・

のぶ君の力が、一気に僕を苦しめ始める。

「えつ」

焦る僕。そうなのだ。のぶ君もまた、体力を奪う作戦を使っていてまだ力を残していたのだ。

一気に押される僕。やばい・・・・手の甲が、机につくもつぱりま
で来てしまった。

(やつぱり・・・・・やつぱり僕はだめ男なのか・・・・・いつまでたつてものぶ君に勝てないのか・・・・・)

今まで耳に入つていなかつたみんなの応援。のぶ君の事や僕の事をみんなが応援していた。その飛び交う応援の中から、聞いた事があるきれいな声が僕に聞こえてきた・・・

「きよ頃・・・・がんばって!」

間違いない綾ちゃんの声だ

・・・・・えつ・・・・・

あ
お
う
え
ん
？
ん
ん
が
ぼ
く
を

その声を聞いたその時、僕に残っていた力が一気に爆発した。いきなりの強さでのぶ君が焦りの一言・・・・・

רְאֵי יְהוָה נָאכַת בְּעִיר

バン！！！

勝負がついた。

- お - お - お - お -

練習もしていないのに、みんなの声がきれいに揃う。僕の勝利にみんなが口を揃えて驚いていたのだ。何回目の挑戦だったんだろう？ついに、ついにあののぶ君に勝つことができた！！！

小さい頃から一緒に遊んでいたのぶ君。今まで、そののぶ君に勝つた事は1回もない。ずっとのぶ君の後ろをついて回っていた。一度は勝ちたかった。どんなスポーツでもどんなゲームでもどんな遊びでも何でもよかつた。ただ、ただ、1回だけは、そののぶ君に勝ちたかった。いつまでたっても2番、ずーと2番は絶対にいやだつたのだ。僕はこの腕相撲でそののぶ君に始めて勝つ事ができた！

僕は手を教室の天井に向かって高々と突き上げた。そして一言・・

「やつ……！ しゃああああ！」

いつもかつこよく勝利するのぶ君。そののぶ君を真似して、僕は自分なりのかつこいい言い方と顔でそのガツツポーズをとった。

そんな僕にみんなからの拍手がいつまでも・・・・いつまでも降り注いだ。

12、冷たいのぶ君の一斎下校

「ふああ～・・・・・・・・」

腕相撲大会で疲れた僕は、校庭に並びながら大きなあくびをした。

今日は一斎下校。朝いつも学校に向かう通学班、それと同じメンバーで家まで帰る一斎下校だ。あの腕相撲大会が終わってから、間違いない友達の僕に対する態度が変わった。いつもはあまりしゃべりかけてこない友達も、僕にどんどん話しかけてくる。なんだかヒーローになつたみたいで気持ちがよかつた。

そんな友達に囲まれる僕に、のぶ君は冷たい視線を送ってきた。少しそれが気になつたけど、気にしないふりをしてみんなのいろんな質問に答え続けた。

一斎下校の今、校庭では朝の通学班の一列を作っている。先頭のはのぶ君。一番後ろが僕。僕がみんな揃つた事を確認して、のぶ君にいつも通りの大きな声を言った。

「のぶ君！～みんな揃つたよ～・・・・」

その声を聞いて ちらつ と僕を見るのぶ君。その目が・・・・・いつもののぶ君とは違つた。ものすごく冷たい目・・・・・友達を見る目じゃない。そして何も言わずにまた前を見る。

(・・・・・なんだか気まずいな・・・・・)

そんなんのぶ君の態度を見て僕は思つた。

小さい頃から親友ののぶ君。僕はそののぶ君と一度もけんかをした事がない。別に今もけんかをしたわけじゃない。だけど・・・なんだか気まずい雰囲気になっていた。

いつも一番ののぶ君。それを見ながら僕は「・・・すごいのぶ君なんでそんなにすごいの？」と口癖のように笑顔で言っていた。もしかしたら僕達2人はそんなやりとりでバランスをとっていたのかかもしれない。そのバランスが崩れてしまった腕相撲大会。むきになつていた僕。それのせいでの2人の仲がおかしくなり始めていた。

「いくよ……みんな……ばらばらにならないようにこねーーー！」

いつも通りのリーダーシップで、のぶ君が言った。

みんなで歩き始めた下校道。「」の一斉下校も朝の通学とまったく同じ。前ではのぶ君達が楽しそうに会話をしている。一番後ろの僕は下を向いたままいろんな事を考えて一人で歩く・・・・・・

今日一日で何かが変わったと思った。いつもの僕とは違う新しい自分になつたと感じた。でも今、またいつもと変わらずみんなに相手をされない帰り道を歩いている。前では人気があるのぶ君が、みんなと楽しそうに会話をしている。

「・・・・・あ～あ・・・・・」

ため息をついた。

結局あの腕相撲大会なんて一つのイベント、一瞬みんなが僕に注目しただけだ。変わった事といったら、のぶ君が僕に冷たくなつた事、

それだけ。2人の仲が崩れてしまった事だけなのだ。

（・・・・ああああ～・・・なんで僕はあんなにむきになつてていたんだろう。こんな事ならあの腕相撲大会でのぶ君に勝たなければよかつた・・・・・）

成功だと思つていた腕相撲大会、僕はその大きな失敗に気付き始めた。

そういうえば、その腕相撲大会の決勝戦で僕が負けそうになつていた時、綾ちゃんの声で「きよ君・・・がんばつて！」と聞こえた気がした。その声を聞いて励まされた僕は、そののぶ君に勝つ事ができたのだ。あの声は本当に綾ちゃんだったのかな？勝負に夢中になつていた僕は、疑いながらあの声を聞いていた。もしかしたら幻？？でも確かに聞こえた氣もある。本人に聞くのは恥ずかしいし・・・

避難訓練で転んだ綾ちゃん。僕はその綾ちゃんの手を握り起こしてあげた。はづかしかつたあの行動。でもその行動のおかげで、もしかしたら綾ちゃんが僕に興味を持ち始めてくれたのかもしれない。だとしたらあの僕を応援した声も、本当に綾ちゃんの声だつたといふことになる。腕相撲大会の失敗を思い出すと落ち込んでしまうと思つた僕は、綾ちゃんととの避難訓練を思い出しながら前向きに帰り道を歩き続けた。

そんな事を考えながら無口に歩いていると、いつの間にかもう、僕の家の前まで着いてしまつた。すると、ずっと前を見ていたのぶ君が後ろを振り返つて僕の方をちらつと見た。またあの冷たい目だ。

「じゃっ・・・・じゃあね・・・・のぶ君・・・・・・・

なんだか言いにくかったその言葉を、僕は頑張つていつも通りに言った。それを聞いてものぶ君は何も言わず、また前を見てさつさと自分の家に入つていった。

(・・・大丈夫・・・今日だけだ・・・今日だけ仲が悪いだけ
だ・・・)

僕はあまりにも今までと変わってしまったのぶ君の態度を見て、そのいやなイメージを振り払つように心の中で言い続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0627y/>

思い出が見える丘

2011年11月21日18時07分発行